

## 文字の書かれた土器

奈良時代や平安時代の遺跡から、文字などの書かれた土器が発見されます。墨で書かれていることから墨書土器（ぼくしょどき）と呼んでいます。多くは1～2文字の漢字が書かれていますが、文献資料の少ない時代ですので遺跡の性格や当時の社会を知る上で重要な資料となっています。

記されている内容は、縁起の良い文字〈吉祥句（きっしょうく）〉、施設を示した文字、仏教に関する文字、人名や地名、それだけでは意味を持ちませんが集落内の集団を識別する文字などです。

それでは土浦市の遺跡で発見された主な墨書土器を紹介しましょう。

吉祥句では「万福」「福得」「福福」「富」「億万」などが発見されています。文字に願いを込めたのでしょうか。大きな集落遺跡からは「本家」「仲家」「大家」など家のつく墨書が発見されていますが、これは集落内の特別な施設を示していると思われる。「寺」「千手寺」「長谷寺」「僧」など、集落内にお寺やお堂があったことを示す墨書土器も見つっています。平安時代になると、一般集落にも仏教が浸透していったようです。

このほか、人名である「丈部（はせつかべ）真磨」、ウマの等級を示したと思われる「青毛」、国府の台所を示す「国厨（くにくりや）」、人の顔を描いた人面墨書など、遺跡の性格を考える上で重要な墨書土器も見つっています。

では、このような墨書は誰が書いたのでしょうか。集落の住人も書いたと思われるが、整った上手な墨書も多く、これは字を書くことに慣れている僧や役人が書いたと考えられます。

左写真)「万福」(長峯遺跡：おおつ野) 「億万」(弁才天遺跡：常名)

左の土器は底を硯として使っています。

右写真)「仲家」(入ノ上遺跡：沖宿町)

